

## 優生思想とその批判—問題の普遍性—

谷口 茂 (南山国際高等学校・中学校)

### 序

「障害者差別解消法」が4月に施行された2016年<sup>(1)</sup>、7月に神奈川県相模原市の障害者福祉施設で、入居者らが刺され19人が死亡、25人が重軽傷を負った事件が起きた。当施設元職員の被告は、その年の2月に精神科措置入院の際、「ヒトラーの思想が降りてきた」と医師に話していたという<sup>(2)</sup>。

被告が言う「ヒトラーの思想」は、障害者や病人を「生きる価値がない」として殺した、ナチスのT4作戦という惨禍を招いた<sup>(3)</sup>。それについては2015年に、NHKで『ホロコーストのリハーサル～障害者虐殺70年目の真実』という番組も放映された<sup>(4)</sup>。そうしたTV番組や先の事件報道もあり、背景にある優生思想が俄かに問題となった<sup>(5)</sup>。番組で現地を訪れた日本障害者協議会代表の藤井克徳氏は、相模原事件に関する対談中、被告にまつわる「特異さだけでは片付けられない部分」として、障害者差別、地域社会からの隔離、優生思想の延長線上の発想があると言う<sup>(6)</sup>。実際この問題は偶発的な事件としてだけではなく、歴史を通し普遍的な人間の問題として扱うべきであろう。

特に未来に向けては、マイケル・J・サンデルが「エンハンスメント」の問題として、あるいはユヴァル・ノア・ハラリが『サピエンス全史』で最後に扱っているように、優生的進化思想は現在の著しい科学技術の進歩とも深い関連をもち、人間の将来に大きな影響を与える可能性を有する。

本稿では優生思想とその問題、またそれに対する批判を概観し、さらにその問題の普遍性について認識を広げる。最後にその問題解決の一つの糸口を、トマス・アクィナスの神学思想に探る。

## 1 優生思想とその問題

「知は力なり」として自然の支配を標榜した16から17世紀、さらに18から19世紀にかけての産業革命における技術の発展を背景にし、19世紀後半は1859年のダーウィンの『種の起源』の発表を代表的な契機に、それまでの世俗的なキリスト教的世界解釈を崩壊させる自然科学主義の立場が広がった時代である<sup>(7)</sup>。そうした時代背景の下で20世紀前半にかけては、人間とその社会を解釈する一つの立場として社会進化論と呼ばれる思想が展開した<sup>(8)</sup>。この思想を具現化したのが、優生思想・優生学である<sup>(9)</sup>。科学史の米本昌平は、次の見解を示す。

「優生学は新興の自然科学によって人間みずからがその自然的運命を改良しようとしたものであり、見方を変えれば、キリスト教的救済史観の世俗化でもあった<sup>(10)</sup>。」

優生思想の学術的基盤となる優生学 Eugenics は、ダーウィンの従兄弟でイギリスの遺伝・統計学者であるフランシス・ゴルトンによって、1883年に誕生した<sup>(11)</sup>。優生思想・優生学については、ダニエル・J・ケヴルズの『優生学の名のもとに』が定評のある研究とされ、これを中心に理解を進める<sup>(12)</sup>。ケヴルズはゴルトンの考察を示す。

『『大自然が無計画に、時間をかけて、しかも無慈悲に成し遂げてきたことを、人間は先見の明を持ちながら素早く、しかも親切にやっけてのけるのだ。』つまり彼は優生学の中に、教会の教義や人間の信仰、宗教的義務に代わる科学的思想を見出したのである。…(中略)…ゴルトンはいったん優生学が世俗的宗教として十分に権威ある重みを持つようになれば、人々は優生学的に見て望ましい生活を送り、優秀な子孫を沢山産むようになるのではないだろうかと考えた<sup>(13)</sup>。』

そしてゴールトンは統計学の視点で遺伝学を眺め、人間の形質や能力も統計的に正規分布しているとし、平均値から上位方向へ推進することで、家畜と同様に人間の進化を促進しようと考えた<sup>(14)</sup>。家畜の形質に関して、彼は次の見解を表明している。

「動物に対する人間の力は人が好むどのような形態の変種でも作りだせるという点で、きわめて大きい。将来の世代の身体的構造は、あたかも粘土と同じように可塑的で、育種家の意のままに管理できるであろう<sup>(15)</sup>。」

ここから発展して人間の形質や知的能力等を遺伝的に探る家系研究法を考案し、優秀な家系には優秀な人材が生まれる確率が高いという一般法則性の定立を試みた。その仮説は、著書の *Hereditary Genius* (1869) にまとめられた<sup>(16)</sup>。ただ逆に、劣等な家系によって社会を退化させる恐れのある遺伝子が残されるという観方が、欧米先進国や日本でも広がり<sup>(17)</sup>、犯罪者・障害者・伝染病者の生殖を制限する「断種」が法制化された<sup>(18)</sup>。人間の遺伝子プールからの劣等遺伝子排除を図ったのである。そしてナチスドイツでは、冒頭のT4 作戦やユダヤ人を民族浄化するとしたホロコーストの悲劇にまで至った<sup>(19)</sup>。

このように優生思想は、二つの側面でその問題を現す<sup>(20)</sup>。一方は優れた生活・生命を探求しようとする側面であり、「積極的優生学 (思想)」と表現される。これはゴールトン自身や社会進化論の立場に認められ、進化・進歩のためにその立場で見て「より優れた」という価値観を前提にする。それまでの世俗的キリスト教世界観、救済史観に取って代わったとされるのは、この価値観が機能する世界観であろう。他方は劣った生活・生命を犠牲にするという側面であり、「消極的 (禁絶的) 優生学 (思想)」と表現される。この側面は視野を人間社会の中で積極的優生学の対象にのみ定め、その視野の外にある「より劣った」とする存在を、人間社会から排除しようとしたものである。

1935年の時点で優生思想を推進したアレキシス・カレルは、前者のために後者のような「犠牲を求める」とした<sup>(21)</sup>。

「これは自然界の法則であるように思われる。多くの生物が、絶えず自然の手で、他の生物の犠牲になっている。(中略) 犠牲の観念、そしてそれが社会的に絶対必要であるという認識を、現代人の心に植えつけねばならない<sup>(22)</sup>。」

自然的な種(普遍)の保存の現象は、「より優勢な生命」のために「劣勢な生命」を犠牲にし、生命の存続の確実性を高めようとする。生物社会では、生存条件における生存確率の高さ(適応)に従って、生存競争と見られる選択現象が生じ、自然淘汰が起こる。社会進化論は、適応進化の過渡期における優生現象が人間社会でも生じると考えるのである。

しかしそうした優生現象は、自然必然であろうか。自然の淘汰の現象は、環境により適合・適応する事態、その条件下におけるいわば最適解の発現に過ぎない。従って条件が変われば、発現形態も変わるものであり、生命 38 億年の歴史がそれを示している。より優れた、劣ったという価値判断の必然的根拠は、生物の「種という普遍性」を示す自然の内には無く、条件に相対的に連動している<sup>(23)</sup>。「生存学」という学際的視点を創設し<sup>(24)</sup>、人間生活の全領域の価値認識を得ようとしている立岩真也は次のように言う。

「こちらの見方が私は好きだという選好がまずあって、それを支えてくれるものとして『自然』そして『自然科学』が持ち出される。(中略) これら—『社会ダーウィニズム』や『優生学』もその一種である—はみな、自らの主張の根拠、主張の補強として、自然に依拠している、自然を持ち出しているものであり、ただ単に『自然(科学)』信仰のもとにあるというだけである<sup>(25)</sup>。」

カレルのような積極的優生思想の根拠を自然界に求める態度に対しても、この後

2.で見る消極的優生思想に対しても、自然界に恣意的に優生現象を見出すのではなく、寧ろ全存在共生の事実を見つけることはできないのか、との批判もできる。自然界における費用対効果が、限定的な現象の効率を高めるような最適解を辿っているのではないことが、現実を広い範囲で見れば確認できるのではないか。自然界においてさえ、優生現象だけではなく、共生・共存を図る弱者への利他的現象が確認されており<sup>(26)</sup>、人間社会を包む自然世界全体で見れば、それが自然の現実と言えないのか。そうした見方ができない優生思想は、もともと「ゴルトン個人の価値判断、あるいはゴルトンの時代のある社会階層で一般的だった価値判断から引き出された」ものであると内井惣七は批判している<sup>(27)</sup>。

結局これは恣意的な理想に普遍性を見て、現実に対する視野狭窄に陥ることにより生じる問題と言えよう<sup>(28)</sup>。

## 2 優生思想・優生学に対する批判

優生思想・優生学への批判は、例えばゴルトンにより優生学が生まれたイギリスでも、1861年の人身保護法に断種が抵触するという人権思想からの主張があり、遺伝重視の家系研究法は、社会的な偏見や差別を助長するとされた<sup>(29)</sup>。ゴルトン自身にしても科学者として自然の現実に向かった際には、統計学の視点から、単純には人種改良が困難なことを明らかにした<sup>(30)</sup>。1932年の国際優生学会議では、遺伝学者H. J. マラーが、「人間の進化には、遺伝よりは経済社会体制の方が重要だと主張した」<sup>(31)</sup>。「人間の進化」を理念とする積極的優生学も、その実践で展開した断種などの事態は、消極的優生学としての問題となった。そのため「七〇年前後に境に、優生学という言葉は否定的な意味を帯びだした」とされるように<sup>(32)</sup>、ここで生じた問題意識は、進化的優生思想への反省をもたらした。

ただ強い批判は、消極的（禁絶的）優生思想として展開した事件に向けられ、そうした事件の蛮行の極に、ナチスのT4作戦がある。これにはミュンスターの司教だったクレメンス・アウグスト・フォン・ガーレン神父をはじめ、批判や抵抗を為

した活動が歴史に刻まれた<sup>(33)</sup>。ガーレン司教の1941年8月の教会説教原稿は当時、国境を越えた<sup>(34)</sup>。そこには人間の生存権は「非生産的な状態におかれた」人間と「生産的であると認められた」人間に、区別なく存すると主張されている。それは人間存在の現実態性が、潜勢態としてある能力を働きへと導くことによる現実態性にあるのではなく、人間存在として存在すること esse 自体にあることを意味している。この主張は、キリスト教神学の中心テーマの一つである神による存在の現実態化「無からの創造 ex nihilo creatio」を前提にしたものといえる<sup>(35)</sup>。しかしこの批判後もナチスの蛮行は続き、民族浄化と謳ってユダヤ人大虐殺にまで及ぶ惨禍を歴史に残した。

この惨禍以前に世界各地で起った断種などを進める優生思想・優生学に対する批判や反対運動でも、カトリック教会は人間創造の教義に則した批判をしていた。

「事実、ナチスが権力を確立するかなり以前から、有力な勢力が一体となって主流派の優生運動に反対する動きを見せていた。これらの反対運動は宗教界や一般社会のさまざまな分野で組織されていたが、…(中略)…カトリックの聖職者も数多く見られる。

カトリック教会の反対は神の創造体系において人間の身体的属性は二義的なものであり、人間の精神こそが最も重要であるとの教義に基づく。たとえ優生主義者にとって不適な人間であっても、それらの人々は教会にとって等しく平等な人間として不滅の靈魂を与えられた神の子である<sup>(36)</sup>。」

カトリック教会において、その思想の論理基盤とされるトマス・アクィナスの人間創造の理解では、神から個々の人間がその靈魂に存在の全てを与えられ dare esse、それを質料的条件のもとにある sub conditione materialis 身体に伝達する communicat materiae esse。この理解によれば、神から存在を与えられた不滅の靈魂を有する全ての人間は、全く平等に神からの愛(存在=現実態化)を個的現実存在として受けている<sup>(37)</sup>。「無からの創造」を基にしたこうした人間創造の理解は、

禁絶的優生学に対し全面的批判を向ける<sup>(38)</sup>。後に扱う現在のエンハンスメントの問題に対する「生の被贈与性 giftedness of life」についての理解を、神学者ウィリアム・メイの主張を援用し論じているサンデルも、論拠を同じくしているとしてよい<sup>(39)</sup>。こうした批判の立場は上の1.で見た、現実世界の存在全体に視野を広げるものであるといえよう。

さて、カトリック教会発信のものだけでなく、またナチスに向けられたものだけでなく、優生思想・優生学への批判が様々にあったことを、ケヴルズも報告しているが<sup>(40)</sup>、そうした様々な批判に並行して、それは展開を続けてきたのであり、カレルに見られるように1930年代では、科学者たちの多くも主流派とされる積極的優生学を推進し、各地で断種法の制定と施行が行われていた。上述の様に1970年頃からようやく現在、これらは科学コミュニティのコンセンサスが誤っていた例とされるようになった<sup>(41)</sup>。

### 3 問題の普遍性

然るにケヴルズは、1985年に出版された著書の序で、次のように述べている。

「著者が優生学の歴史を執筆するようになった動機の一つは、人間の遺伝的な操作を加えようとする最近の論議のすべてに、優生学が暗い影を落としているのを憂慮したからである<sup>(42)</sup>。」

また2007年にサンデルも、「今日の遺伝子操作や遺伝子増強(エンハンスメント)に関する議論にも、優生学の暗い影が落ちている」と、同様の見解を示している<sup>(43)</sup>。優生思想・優生学はその動機において、積極的側面の「より優れた生」を求めている。ゴールトンの意図も、キリスト教の救済史観に代わって自然科学に根拠を得、人間の進化を追求することであった。罪過を有する人間が神へと立ち返る過程を説くキリスト教の救済史観は、古代・中世の思想的発展を経て<sup>(44)</sup>、近代のプロテスタ

ンティズムの経綸観として展開し、ウェーバーによれば資本主義の社会経済システムにその倫理が機能していった<sup>(45)</sup>。それを超克すべく科学的根拠を与えて未来（終末）を掴もうとし、世界の進化の過程に人間が積極的に参加して進歩するという発想が優生思想であった。ここでの進化は自然の過程ではなく進歩という人為の過程として、自然世界を改変するに留まらず人間自らの存在様態を改変しようとする事態が、科学技術によって生じている（恩寵と理性という神学上の問題に繋がる）<sup>(46)</sup>。これこそが、キリスト教の救済史観に取って代わったとされる要因でもある。

ケヴルズやサンデルの憂慮は、自然的進化と人為的進化（進歩）との錯綜によって生じる問題が時代と共に進展し、優生思想はそれを浮き彫りにしたが、実は現在がその最先端の状況にあるとの認識から生じている。ケヴルズもサンデルも分子生物学者、Robert L. Sinsheimer が提起した「新しい優生学」に照準を向け<sup>(47)</sup>、それを称揚する言葉を引用している。

「古い優生学は、適者の繁殖と不適者の排除に時間のかかる選択を必要とした。新しい優生学は、原理的には不適者のレベルを遺伝子段階まで高めることができる。古い優生学は、現存するわれわれ人間の遺伝子プールを数量的に改善するにとどまっている。新しい優生学の地平線は理論的には無限であり、われわれはかつて想像されたこともないような新しい遺伝子と新しい形質とを創造する力を持つようになるのである<sup>(48)</sup>。」

「コペルニクスやダーウィンは『人間を宇宙の焦点に位置するという輝かしい栄光から引き摺り下ろした』が、新たな生物学は万物の要としての人間の役割を回復するだろうというのである。われわれは、新遺伝学上の知識という鏡を通じて、進化系列上の連鎖以上のもので自らを見出すことになる。『われわれはまったく新たなレベルの進化への移行の主体となりうるのである。これは宇宙レベルの出来事である<sup>(49)</sup>。』」

分子生物学の進歩により遺伝子操作の技術は、人間を新たな生命の次元に改変す

る力をもつようになる。その力を利用して、言わば積極的優生学を推し進めようというのが新しい優生学である。これに対するケヴェルズやサンデルの憂慮は、様々に指摘されている問題点を鑑みて表明されており、その指摘は社会全体に広がっている。一つに「能力強化（エンハンスメント）の倫理性を危惧する人からは、人類の間に二つの階層が生み出されてしまうという危険性を指摘する声もある<sup>(50)</sup>。」かつての優生思想は人間の進化・進歩を社会として推し進めようとしたが、現在のリベラル優生学と呼ばれる立場などでは、個人の自由な選択で進歩した技術力を利用できるとする<sup>(51)</sup>。しかしそうした自由は、経済的理由などでその技術力の利用選択が二分される。その結果、進化・進歩を享受する人間とそうでない人間との階層に分かれていくであろうとの危惧である<sup>(52)</sup>。

さらに、こうした遺伝子工学、分子生物学の次元に人間の進化・進歩は、留まらない。そもそも分子生物学の進歩自体も、ゲノムの解析技術などはコンピュータの進歩によって発展したが、コンピュータ及びそれに処理される（それに乗り媒体とする）情報そのものの進化・進歩は、有機生命体の進化・進歩に対して次元を超えた速度を現す<sup>(53)</sup>。それが人間の進化・進歩にフィードバックされる状況が、未来予測されている<sup>(54)</sup>。「ムーアの法則」が示す指数関数的に進化するAI技術、それによって自身を進化させる人間が、「シンギュラリティ」と表現される未来の予測時点において、「ポスト・ヒューマン」に進化史の主体を移行すると、レイ・カーツワイルを中心にこの分野の研究者たちは主張する<sup>(55)</sup>。

「われわれは現在、文化やテクノロジーの進化によってずいぶんと異なるレベルに到達しています。この進化が大きな影響を与えてきたことがわかります。われわれはすでにテクノロジカルな存在になってきています。…（中略）…無機的部分は、年々倍々になるという指数関数的な成長を続けるのに対して、有機的部分はちっとも変化しないのですから、二〇四五年までには、われわれの存在は、そのほとんどが無機的なものになってしまうでしょう<sup>(56)</sup>。」

こうした予測を受けてユヴァルは世界的ベストセラー『サピエンス全史』の中で、次の疑問を投げかけている。

「現代世界は、歴史上初めて全人類の基本的平等性を認めたことを誇りとしているが、これまでで最も不平等な社会を生み出そうとしているところなのかもしれない<sup>(57)</sup>。」

分子生物学上のエンハンスメントを越えて、AI 技術による人類の進歩が極端な方向に発展する可能性があることを、ユヴァルは指摘している。TED でのトークを行った時も彼は、人類が二分するであろうと最後に話す<sup>(58)</sup>。

「これは予言ではありませんが、我々の前にその可能性が示されてきています。ひとつの可能性は『役に立たない人々』という新たな巨大な層の誕生です。もうひとつは、今までとは違った生物学的な階級に区分されていくということです。富裕層は仮想の神へと成り上がり、貧困層は役立たずの層に成り下がっていくのです<sup>(59)</sup>。」

19 世紀の優生思想から現在までの時代に限らず、古代や未来予測を含めた“サピエンス全史”の内に問題を探ると、そこに次のような批判ができる。

即ち、そこではこの歴史の主体として焦点を合わされるものが普遍的理想でしかなく、個々の現実存在ではないこと、結果的に人間という存在者の定義が曖昧になっていることが問題であると言えないか。こうした普遍的理想のみを追い求め、現実存在を忘却しがちな(排除さえする)優生思想は、人間の普遍的な問題であると、竹内章郎は米本昌平の見解に与して表現している。

「優生思想が、ナチスドイツなどに特有の、ごく一部の狂信集団の思想ではなく、プラトン以来、どの時代にも存在し、また現代でも存在している 普遍的な思想で

ある、という認識は一部では定着しつつある<sup>(60)</sup>。」

普遍性の根源を説くイデア論を中心に理想主義とされるプラトンの思想では、国家(社会)の在り方を探求する場合も、普遍的理想国家に価値を偏重した論が説かれ、個々の現実存在への(福祉的)観点から外れる<sup>(61)</sup>。またプラトンの思考法に基づくならば、人間の普遍的イデア(範型=定義の源泉)も、個々の人間を離れて存在する。これは既にアリストテレスがイデア離存説を批判し、現実中存在するのは個々の存在であり、普遍的理想的イデアではないとした<sup>(62)</sup>。然るに普遍的理想をのみ目指せば、個々の現実存在が認識の背後に追いやられてしまう。そうした思想の流れを、優生思想は継いでいるといえよう。

## 結語：個の救済

そうした流れが注ぎ込む先を見失わぬような思想の一つとして、トマスによって体系化された神学思想を観ることが出来る。トマスは、教父やアウグスティヌスを経由して「キリスト教的に変容されたイデア論」というものを<sup>(63)</sup>、さらに自身の神学体系の中で「個物のイデア」が根源的なイデアであると論じるまでに至った<sup>(64)</sup>。この思考法は、上の指摘のように歴史の内に普遍的に流れるとされた優生思想、その根底にある普遍的理想を追い求めるプラトンの思考法に、個々の現実存在の「救済」という動機を与えている。

さらに優生思想の根本にある問題が、普遍的理想に向かう際に個々の現実存在を視野の外に置くために生じる問題であると批判し得るならば<sup>(65)</sup>、トマスの神学思想の中には、全ての現実態化される個々の存在を際立たせる論がある。それは多様化の極限を示す、個性化論としての「天使論」である<sup>(66)</sup>。優生思想に抗して障害者論を論じる中で、個々の存在の「かけがえのなさ」を主張する例が様々にあるが<sup>(67)</sup>、これはその理論的枠組みを与え得るのではないか<sup>(68)</sup>。

トマスは天使の個性性が、一個であると同時に普遍の種として他と分かたれる無

限の多様性を、その存在様態に有すると説く<sup>(69)</sup>。この天使の多様性は、神学思想上の分離靈魂や復活後の個性性を考える上で人間にも類比的適合性が見出されるのであり、多くの研究者がその重要性を指摘している<sup>(70)</sup>。例えば人間の理解のために、科学としての霊長類研究がなされるのに対して、未来志向として天使論研究の妥当性を示す見解もある<sup>(71)</sup>。

こうした天使の個性性が示す無限の多様性の理解が、時間とともに変転する質料的条件を超越した次元で、全ての人間の個々の存在についても、その尊厳性を確認させてくれるのではないだろうか。

## 注

- (1) 国連の「障害者の権利に関する条約」(2006年採択) 批准を基に制定。
- (2) 保坂展人『相模原事件とヘイトクライム』(岩波書店、2016年) 26頁。
- (3) 宮野彬「ナチスドイツの安楽死思想：ヒトラーの安楽死計画」『鹿児島大学法学部紀要・法学論集』4(鹿児島大学、1968年) 119～151頁。
- (4) 相模原事件後も放映し、番組冒頭で触れた。「ハートネットTV」でも放映した。
- (5) 保坂展人、上掲書。神里達博「同じ船の意識あるか」『朝日新聞』2016年8月19日。『現代思想』相模原障害者殺傷事件特別号(青土社、2016年)。立岩真也、杉田俊介『相模原障害者殺傷事件—優生思想とヘイトクライム』(青土社、2016年)。
- (6) 保坂展人、上掲書 23、40頁。
- (7) 米本昌平他『優生学と人間社会』現代新書 1511(講談社、2000年) 15頁。米本昌平『遺伝管理社会—ナチスと近未来』(弘文堂、1989年)。立岩真也『私的所有論』(勁草書房、1997年) 258頁。
- (8) 社会進化論はハーバート・スペンサーが展開した。米本昌平他『優生学と人間社会』16頁。ジョナサン・ハイト『社会はなぜ左と右にわかれるのか』高橋洋訳(紀伊国屋書店、2014年) 67頁。立岩真也『私的所有論』229～230頁、ド

イツの民族衛生学も含めた研究。

- (9) Daniel J Kevles, *In the Name of Eugenics: Genetics and the Uses of Human Heredity*, Alfred A. Knopf, New York, 1985. 邦訳、ダニエル・J・ケヴルズ『優生学の名のもとに—「人類改良」の悪夢の百年』西俣総平訳(朝日新聞社、1993年) 37頁。立岩真也『私的所有論』230、257頁。
- (10) 米本昌平他『優生学と人間社会』16頁。立岩真也『私的所有論』231頁。
- (11) 立岩真也『私的所有論』255頁。
- (12) ケヴルズ『優生学の名のもとに』上掲書。米本昌平他『優生学と人間社会』上掲書。立木教夫「生命科学の進歩と優生思想の変遷—ダニエル・J・ケヴルズ『優生学の名のもとに』を中心として—」『モラロジー研究』39(1994年)。
- (13) ケヴルズ、邦訳上掲書 24~25、122、123頁。
- (14) ケヴルズ、邦訳上掲書 26頁。内井惣七『科学の倫理学』(丸善、2002年) 121~125頁。
- (15) Francis Galton, *Hereditary Character and Talent*, *Macmillan's Magazine*, vol. 12, 1865, p. 157. <http://galton.org/essays> 内井惣七『科学の倫理学』123頁。
- (16) Francis Galton, *Hereditary Genius*, 1869 <http://galton.org/books> 内井惣七『科学の倫理学』125頁。
- (17) 福沢諭吉も「優生賞揚・劣生排除論」を唱えた。竹内章郎『いのちの平等論 現代の優生思想に抗して』(岩波書店、2005年) 24、25頁。鈴木善次「日本における優生思想・優生運動の軌跡」、ケヴルズ、邦訳上掲書 508~510頁。
- (18) 断種法を中心に優生立法が施行された。ケヴルズ、邦訳上掲書 169~196頁。
- (19) 立岩真也『私的所有論』223~237頁。ケヴルズ、邦訳上掲書 203~206頁。
- (20) ケヴルズ、邦訳上掲書 151頁。立木教夫、上掲論文 84頁。
- (21) アレキシス・カレル『人間 この未知なるもの』渡部昇一訳(三笠書房、1980年) 322~323頁。原著は1935年。
- (22) 前註。
- (23) 内井惣七『科学の倫理学』126頁。
- (24) 立命館の文部科学省グローバルCOEプログラム。

- (25) 立岩真也『私的所有論』111～112頁。
- (26) ケヴルズ、邦訳上掲書 462頁。
- (27) 内井惣七『科学の倫理学』126頁。
- (28) 日本の福祉行政を方向付けた糸賀一雄は、視野を拡張した例といえる。
- (29) ケヴルズ、邦訳上掲書 201頁。
- (30) 内井惣七『科学の倫理学』133～134頁。
- (31) 米本昌平他『優生学と人間社会』45頁。
- (32) 米本昌平他『優生学と人間社会』47頁。
- (33) 河島幸夫『戦争と教会 ナチズムとキリスト教』（いのちのことは社、2015年）86～105頁。松本佐保『バチカン近現代史 ローマ教皇たちの「近代」との格闘』（中公新書、2013年）。
- (34) 大澤武男『ローマ教皇とナチス』（文春新書、2004年）129頁。塩崎弘明「1933年7月20日のライヒス・コンコルダート」『上智史学』11（上智大学、1966年）89～101頁。河島幸夫「ドイツ政治史とキリスト教—西南での研究と教育の40年—」『西南学院大学法学論集』44（西南学院大学学術研究所、2012年）67～80頁。泉彪之助「精神疾患患者・遺伝性疾患患者に対するナチスの「安楽死」作戦とミュンスター司教フォン・ガーレン」『日本医史学雑誌』49（日本医史学会、2003年）277～319頁。保坂展人『相模原事件とヘイトクライム』37頁。このメッセージの論拠は、トマス・ヘンリー・ハクスリーが1893年オックスフォード大学「ロマネス講演」で社会的ダーウィニズムを批判した「自然宇宙の過程と人為の過程を比較した思考実験」にも共通している。内井惣七『科学の倫理学』128～132頁。
- (35) この前提は、竹内章郎の「能力の共同性論」や立岩真也の「私的所有論」の根拠にもなり得る。本稿註60、67参照。
- (36) ケヴルズ、邦訳上掲書 206頁。
- (37) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, Q.76 a.1,3; Q.118 a.2. 谷口茂「トマスにおける神の働きの対象としての個物—神の外なる果に迄及ぶ働きにおける—」『南山神学 別冊』9（南山大学、1992年）189、193、194頁。

- (38) ケヴルズ、邦訳上掲書 207 頁。カトリック教会のナチスとの関わりは、ハーバーマス、ラッチンガー『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』三島憲一訳（岩波書店、2007 年）の訳者解説、参照。
- (39) Michael J. Sandel, *THE CASE AGAINST PERFECTION: Ethics in the Age of Genetic Engineering*, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 2007. 邦訳、マイケル・J・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理』林芳紀、伊吹友秀訳（ナカニシヤ出版、2010 年）30～50 頁、100、168 頁、訳者解説を参照。
- (40) ケヴルズ、邦訳上掲書 197 頁。
- (41) 吉成真由美編『人類の未来A I、経済、民主主義』（NHK出版、2017 年）264 頁。
- (42) ケヴルズ、邦訳上掲書 3～4 頁。立木教夫、上掲論文。
- (43) サンデル、邦訳上掲書 72 頁。
- (44) 古代・中世ではグノーシズムとの相克やネオ・プラトニズムからの影響を受け救済史観が発展した。
- (45) マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫、1999 年）。サンデル、邦訳上掲書 72 頁。
- (46) 内井惣七『科学の倫理学』128 頁。
- (47) ケヴルズ、邦訳上掲書 431 頁。サンデル、邦訳上掲書 103 頁。
- (48) ケヴルズ、邦訳上掲書 455～456 頁。
- (49) サンデル、邦訳上掲書 104 頁。
- (50) サンデル、邦訳上掲書 18 頁。
- (51) サンデル、邦訳上掲書 80～81 頁。
- (52) 二極化を先進国と発展途上国とする見解もある。米本昌平他『優生学と人間社会』271 頁。
- (53) 谷口茂「神の知に観られる個一救いの対象一」『日本カトリック神学会誌』27（日本カトリック神学会、2016 年）。ジェイムズ・グリック『インフォメーション情報技術の人類史一』楡井浩一訳（新潮社、2013 年）489 頁。

- (54) 谷口茂「人となられた神と 神となろうとする人—神学と進化思想との対話」『日本カトリック神学会誌』14 (日本カトリック神学会、2003年)。
- (55) 谷口茂「人となられた神と 神となろうとする人」、「神の知に観られる個」、参照。
- (56) 吉成真由美編、上掲書 126～127頁。池上高志、石黒浩『人間と機械のあいだ』(講談社、2016年) 36、203頁。
- (57) ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』柴田裕之訳 (河出書房新社、2016年) 下 258頁。
- (58) [https://www.ted.com/talks/yuval\\_noah\\_harari\\_what\\_explains\\_the\\_rise\\_of\\_humans?language=ja](https://www.ted.com/talks/yuval_noah_harari_what_explains_the_rise_of_humans?language=ja) 吉成真由美編、上掲書 125頁。
- (59) 前註。
- (60) 竹内章郎『いのちの平等論 現代の優生思想に抗して』(岩波書店、2005年) 226頁。
- (61) 竹内は、プラトン『国家』第三卷 407E を例とする。
- (62) プラトンとアリストテレスは現実態にあるものが逆転する。
- (63) 山田晶「非有のアイデア」『在りて在る者』(創文社、1979年) 366頁。水落健治「トマス・アクィナスにおけるアイデアの問題—De Veritate q.3—」『途上』11 (思想とキリスト教研究会編、1981年) 3～7頁。
- (64) 谷口茂『『個物のアイデア』アイデアとして矛盾か—トマス・アクィナスのアイデア論—』『中部哲学会年報』47 (中部哲学会編、2015年)。
- (65) こうした普遍的傾向性が思想史上様々に現れ、グノーシス的活動になっているという観方もできる。救済の知を得た者のエリート性や現代の科学の急進性の中に、それが読み取れるというH.ヨナスの指摘もある。同時にグノーシス主義とプラトン主義の類同性も、この傾向性の故であろう。H. Jonas, *The Gnostic Religion: The Message of the Alien God & the Beginnings of Christianity*, Beacon Press, 1958. 邦訳、H.ヨナス『グノーシスの宗教 異邦の神の福音とキリスト教の端緒』秋山さと子・入江良平訳 (人文書院、1986年)。
- (66) Thomas, *Summa Theologiae*, I, Q.44～. 稲垣良典『天使論序説』学術文庫 1232

(講談社、1996年) 34頁。

(67) 立岩真也『私的所有論』424頁。

(68) 谷口茂「多様化の極限—復活に与る個性—」『日本カトリック神学会誌』17  
(日本カトリック神学会、2006年)

(69) Thomas, *Summa Theologiae*, I, Q.50. 谷口茂「トマスにおける神の働きの対象  
としての個物—神の外なる果にまで及ぶ働きにおける—」178~184頁。

(70) 真方敬道『中世個体論研究』(南窓社、昭和63年) 90頁。蒔苗暢夫「トマス  
に於る天使の墮罪について」『アカデミア』29(南山大学、1979年) 73頁。  
稲垣良典『天使論序説』参照。

(71) 稲垣良典『天使論序説』34~35頁。稲垣良典『知性としての精神』(PHP研  
究書、2000年) 74~129頁。

